カナダ・アメリカの旅
——保育の理論と実践を求めて——

ミネソタ大学付属ナースリースクール三十年間の移り変り

津守　真

私の恩師であり、いまは名誉教授のミルドレッド・テンプリン先生が、ミネソタ大学の幼児教育センターに私を案内したいと云われたとき、私は気がすすまぬままに、日時もきめずにいた。それは、一九七一年つまり十四年前に児童研究所付属のナースリースクールを訪問したときの苦い経験があったからである。三十年前に私が大学院学生として、始終実習に出入りして子どもと遊んでいたそのナースリースクールが、一九七一年には知的教育のプログラムを実施する実務教育の場になっていた。細長く大きな部屋は、いくつものコーナーに仕切られ、テープレコーダーなどを使って、言語や文字、数の認知能力の教育のプログラムが行われていた。かつては遊びを中心とした進歩主義教育の牙城のひとつであったそのナースリースクールが、知的発達の心理学の実験室のようであった。案内して下さったH教授は、得意気にいろいろと説明された。進歩主義教育との比較における

私の疑問に対しても、それは哲学であって科学ではないと議論を切られてしまった。それ以来、私は、教育における科学とは何かという疑問を抱きつづけた。

短い滞在の最后の日になって、時間の都合がついたらいつでも電話するようにと云われたテンプリン先生のことばを思い出し、児童研究所を訪ねることにした。テンプリン先生は名誉教授であるが、いまでも児童研究所の中に小さな部屋を持っておられる。直ちに「幼児期の教育と発達センター」(以後略して幼児教育センターと記す)の長であるシャーリー・ムーア女史のオフィスに案内された。このセンターは、一九七三年に、幼児教育に関連する大学の諸学部学科の人々及び、幼児に関連する公私諸学校、児童福祉、公衆衛生、特殊教育等の大学外部の人々が集まって、幼児教育に関するブレインストーミングを行ったことから始まったとのことである。このセンターのオフィスは、児童研究所の中に置かれているが、その運営も活動も、大学の諸学部(とくに教育学部と家政学部)及び外部の地域諸施設の人々によって企画され実施されている。ムーア女史の話をきいているうちに、その考え方は多面的であり、人間的であり、幼児の生活全体が考慮されていることが分ってきた。ミネソタ大学の児童研究所は、一九二五年に創設以来、大学の独立研究所だったが、一九五七年にカレッヂ・オブ・エヂュケーションの所属となり、名称も児童発達研究所と改められた。そして、一九七三年以来、幼児教育に関しては、センターとして再び独立機関となったことになる。幼児の問題は、限られた一面からだけ見たのではだめで、人間と生活の全体の中で理解されねばならないことが、この三十年間の歴史の中で、明らかになってきたのだと思う。ムーア女史はこのセンターの企画当初からの長であり、とくにこの六、七年の間にこのセンターは全米に認められるようになってきたと話された。ムーア女史のオフィスの書棚には私に馴染み深い、この三十年間の児童心理学と幼児教育の書物が並んでいて、それが私にも寛いだ気分をよび起してくれたのだろうか。愉快に時を過してから、ナースリースクールに案内された。

以前と同じ細長い部屋だったが、前のようなコーナーはなく、つみきなどで遊んだあとが散らかっており、数人の子どもが室内にいた。ドアをあけて裏庭に出たとたん、子どもたちがあちこちに散らばって、地面を掘ったり、水を流している姿を見て驚いた。子どもがそれぞれに戸外で遊んでいる。私は予想していなかった光景であった。子どもの背の高さに台を作り、水をためて、泥や木の葉をいれて遊ぶようにしたところもある。私は嬉しくなって、水の中に手をいれて遊んでいる子どもたちのところに近づいた。いつも幼稚園を訪問するときのように、私も子どもの傍で水に手を入れたりしていると、じきにひとりの子どもが親しげに私を見て、木の葉をくれるという。私が手を差し出すと、木製の大きなスプーンに水をすくってくれた。私はそのスプーンを受けとり、やりとりしているうちに、隣にきた男の子にそのスプーンを渡してしまった。気が付くと、最初の子どもが泣いている。もうひとりの男の子は、私がそのスプーンをくれたのだと云い張る。それは、さきほどの子どもが自分のものとして使っていたスプーンであった。私はいそいで別のスプーンを見付けて渡したがだめだった。これもいつものように、私は困って、二人の間にはさまって、あやまったり、いろいろと言ったりしていたのだが、泣きやまない。戸口でムーア女史と園長のゲーリー先生とが待っているのが分るのだが、立ち去るわけにいかず、一瞬のことではあるが、訪問者から保育者となって奮闘した。ちょうどそこに男性の保育者がきて子どもを抱き上げた。私はその場の経緯を説明し、皆のところにいそいだ。その男性の先生は、そのクラスの担任の先生であった。

そこから部屋を抜けて、更に裏庭に案内された。以前に私が実習していたころよりも、庭はひろげられ、芝生が植えられ、木で作った遊具がいくつか植えられていた。また一隅には屋根で囲った場所があり、砂場になっていた。北国の冬は長いので、周囲を蔽われた砂場で寒い時も子どもたちは遊ぶことができるのだろうと思った。アメリカの幼稚園は、しばしば、園庭は金網で仕切

られた無愛想なところが多いが、このナースリースクールの庭が園庭らしくつくりかえられてあるのも驚きであった。多勢の子どもたちが、ひとり、二人、数人ずつ元気に遊んでいた。庭の真中の木の株に、小児科のインターンの医学生が腰をおろして観察していた。これは幼児教育センターのプログラムの一環とのことであった。また、実習生らしい学生が何人もまじっており、迎えにきたらしい親たちも、何人か園庭の中にはいっていた。この園庭で子どもたちや大人たちが、活気をもって活動している姿は、三十年以前には見られなかったことのように思う。そのころは、このナースリースクールでは、室内で子どもは自由に遊んでいたが、戸外の遊びは貧弱だった。しかし、この日の園庭の子どもたちの様子は、お茶の水の付属幼稚園や、現在の私の愛育養護学校の子どもたちを見るときと変らなかった。大人が自由に出入りして子どもたちと交わり、また子どもから学ぼうとしている点では、それ以上にすら思えた。

帰り際に、ひとりの小さな子どもが、私の手にふれているのに気付いた。ふりかえると、その子は横たえてある丸太の上を渡ろうとして、私の体につかまったのであった。じきにその子は手を離して、ひとりで丸太の上を恐るおそる歩き始めた。私もだまって見ていると、遂にその子は端まで歩いていってとびおり、私の顔をみてにっこり笑った。向う側に母親がいて、その子が渡り終えるのを見守っており、私と目が合って、母親もにっこり笑った。

ナースリースクールの園長は、リン・ゲール女史で、元気のよい中年の温和な人であった。三十年間のこのナースリースクールの変遷について私が感想を話すと、その通りであると云って、それから話が弾んだ。このナースリースクールは、幼児教育センターと密切な関連をもって運営されるようになって以来、子どもの遊びを主とするようになったのだという。園長であるゲール女史も、センター長であるムーア女史も、担任の先生も、いずれも、勤務時間の五〇パーセントはナースリースクールで過し、他の五〇パーセントは大学の授業のために使うよ

うな規則になっているとのことであった。そのことは後になって見たナースリースクールのハンドブックにも明記されてあった。

私共の話は、直ちにメインストリームに及んだ。それは、十年程前に、障害児もナースリースクール・幼稚園・学校で教育を受ける権利を有するという州の法律が通過したことからはじまる。このナースリースクールにも、昨年は二人の障害児がいたという。今年は軽度の子どもだとのことであった。ゲール女史は、どこでも障害児を受けいれることになったのだが、その場合の保育の質が問題なのだと何度も強調された。つまり、このナースリースクールのように、それぞれの子どもが遊べるように、子どもに合わせた生活が作られていればよいが、そうでなければ、障害児は普通児の集団の中で悩みを大きくする場合もある。また、とくに情緒障害、自閉症の場合には、普通児と一緒に保育することに困難がある。子どもによっては、園の外に出ていきたがることがないかと質問すると、そういう場合には実習生がついていくのだが、そういう実習生の存在は、実に貴重なものであるという答えであった。そういう役をとる人、と場がなければ、障害児を含めてやってゆくのは困難な場合もある。

私は、障害児教育の問題は、障害をどのように治すか、欠落した能力をいかに訓練によって向上させるかということではなくて、障害という宿命を負っている子どもを保育することが課題なのだという私の考えを話すと、同意を示された。私はアメリカにも同じ考えの人々がいることを心強く思った。

しかし、これはアメリカでは決して一般的な考え方とはいえない。この前日に、私共はこの滞在中泊めて頂いている友人のN氏夫妻に伴われて、カレッヂ・センターという肢体不自由児の社会復帰を目的とする学校にいった。郊外のひろびろとしたところにある設備の整った立派な学校であった。成人のための部門があり、肢体不自由の人のためのセクレタリー養成機関、アマチュア無線の資格取得のための訓練室などあって、身体障害者が、

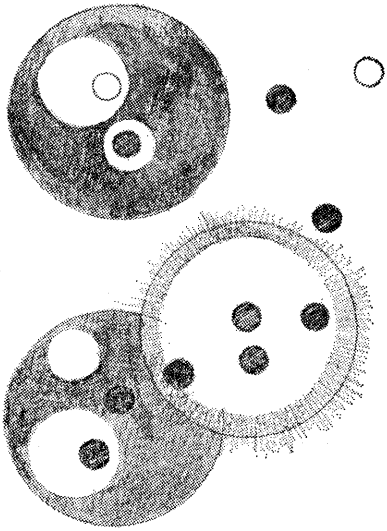
障害を補い克服して社会に参加できるように、カレッヂ（勇気）を与えることを標榜した学校である。一年間を目標として、自覚して努力する者にとってこれは意義があると思う。しかし、幼児にはこの考え方はあてはまらない。この学校には幼児部門が付設されていて、観察窓から見学した。そこで何が行われているかは、プログラム表を見れば分ると説明された。それには月曜から金曜まで、十五分刻みぐらいに、プログラムがぎっしりと記載されていた。集まっている子どもたちの身体障害の程度は、それほど重度と見えない者も多く、見学していて、私共にはこの型にはまった教育がもどかしく思えた。障害を何とかするという以前に、そのままで子どもの存在そのものを受けとめる子どもの生活全体への配慮が必要であろう。ミネソタ大学付属ナースリースクールとは、この点で対照的であった。

メインストリーム、すなわち大河主義の運動には、障害児を迎えいれるというだけではなく、すべて異質な者を加えてひとつの社会を形成するという考えがある。移民の子ども、難民の子ども、異人種の子どもを、それぞれが快く迎え、異質な人のもつ文化を尊重して、共同の社会を形成するようにということは、いま、西欧の学校で最大の教育課題である。障害児もその一環にほかならない。このナースリースクールの入園資格には、人種、信条、皮膚の色、性、国籍を問わず、だれにでも楽しい権利をもって、一般に開かれていると記されており、更に、欠員を生じたときには、子どものきょうだいが第一の優先順位、次にマイノリティ、すなわち、移民や障害児と明記されている。

ナースリースクールから帰るとき、廊下の両側の壁に、子どもがマヂックでかいた線の落書きがたくさんあることに気が付いた。その一部分にはパネルが貼られて落書きの壁がかくしてあったが、廊下に落書きのある園を見るのは珍らしいことである。このことからも、このナースリースクールの保育の毎日の様子が察せられる。

この三十二年間に、私は三回、同じナースリースクールを訪ねたことになる。第一回は一九五三年、第二回は

一九七一年、第三回は今回で一九八五年である。その移り変りを考えてみるとき、第一回のときは、自由な遊びを主としながら、中心となる主題を作ろうとする進歩主義的教育の残照とも云える時代であった。第二回のときは、知的教育の心理学的プログラムを実施することが科学的教育と考えられた時代であった。そして今回は、すべての子どもに分け隔てなく、遊びそのものを重視している点で、前のどの時期にもまして、子どもの生活そのものに目をとめているように思えた。このことは目下進行中の現代に属することだから、これからどの方向に向っていくのか確言はできないが、私は、アメリカの社会、大学、教育界の自己修復力の早さに驚いている。また、この間に幼稚園の教育の内容には変化が見られても、数人を単位とする小さな集団と先生との個人的接触が核となっていて、決して画一的授業形式にもどることはなかったことも注目すべきことである。これは個人主義の文化によることもあろうが、今世紀のはじめに確立された進歩主義教育の力も大きいと私は考える。ただ、今回訪問したのは、二才から五才までのナースリースクールであって、アメリカでは、小学校に入る前の一年間がキンダーガルテンである。小学校低学年も日本のような画一集団教育ではないから、大体推察はつくのだが、現状を見る暇なしに、その日の午後の飛行機でロスに向った。



この日のことをあれこれ考えながら飛行機の中で見たこのナースリースクールのハンドブックには、次のようなことが記されていた。

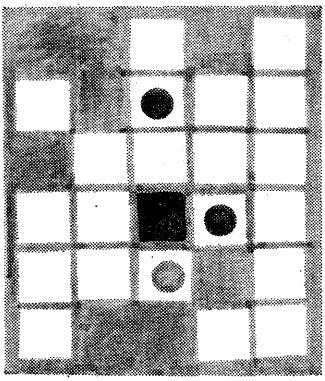
「このナースリースクールは、2才から5才までの約百人の子どもに、発達的に方向づけられた教育経験を与えるところです。カリキュラムは、発見、指導された模索、及び遊びを基礎としています。すべてのクラスルームでは、いろいろの場面や活動が中断されずに継続して行われるようになっており、どの子どもも自分自身の速度で発達することが許されます。また、個人的感情生活の技能や価値、知識や知的能力、グループの生活の価値観や人間関係を、自分自身のやり方で学ぶことが許されます。

『理解すること』『一緒にやってゆくこと』『協力すること』などの概念は、一日の特定の時間割の中で教えられるのではなく、子ども自身によって経験されます。それは調理や外出のための仕度のような活動に子どもが参加することにより、大人から学んでゆきます。子どもが経験するであろうことに関心を向けるだけでなく、子どもが参加するときに生じるさまざまなことにも関心を向けます。子どもは、人々を好きになることを学び、また、自分にもできるという自信を経験せねばなりません。

先生たちは、子どもたちの要求や興味にこたえるような活動を計画します。したがって、それぞれの先生のやり方と、子どもたちの要求と興味によって、それぞれのクラスルームでは違ったことをしています。先生の役割は、子どもがその技能、知識、経験を組織づけ、明確にし、ひろげるのを助けることです。学校はアンフォーマルにみえますが、そのプログラムと環境は、個人とグループの目標にかなうように注意深く計画し構造化した結果生れたものです。

遊びと動きの経験は、学習が行われる最も重要な二つの場です。幼児は、具体的に手でさわることのできる物であそびます。そして抽象的現象を操作するよりも、直接に物をいじることにより大きな価値を認めます。したがって、子どもたちが積極的に没頭することができるよ

うな活動を注意深く計画することが、プログラムの最も重要なことです。……」

十四年前にこのナースリースクールを訪問したときに抱いた疑問、教育における科学とは何かという問題に対して、最も適切に答えてくれているのは、カナダの学会でも出会った西ドイツの学者、ヘルムート・ダナーの著書、「精神科学としての教育学の方法」である。教育科学の方法は、自然科学における客観的実証主義とは異る。人間にかかわる精神科学の方法は「理解」である。科学には自然科学と精神科学があるのであって、教育学はこの後者に属する。このことについては今後も考えつづけてゆきたい。

（愛育養護学校）